

「国語教育学史」

国語教育の実践・研究の諸成果を本格的に分析し考察して、しかるべき評価・位置づけを与えていくというしごとは、国語教育の理論・実践を歴史的展望をもって推進していくうえで不可欠の作業である。しかし、こうした研究史作業を進めていくことは、それに必要な資料・情報の確保・累積もじゅうぶんでなく、また、そうした研究を専攻する研究者も出現したいというわが国の状況にあつては、困難をきわめるしごとであることも事実である。野地先生は、こうした困難な条件のもとにありながら、つとにこの方面の研究の必要性・重要性を意識され、国語教育の理論史（学説史）・実践史の研究に力を傾けてこられた。本書は、それらの研究成果の中から、国語教育学史に關するものを、次の四章に再編・収録されたものである。

Ⅰ 戦前における国語教育学の展開

Ⅱ 戦後における国語教育学の展開

Ⅲ 国語教育学の系譜と創建

Ⅳ 国語教育学年表

まずⅠでは、一九三〇年代における国語教育学研究の動向が、いわゆる「国語教育学」の名を冠して論述されたものを主たる考察の対象として、その成立・展開・内容・方法にわたって明らかにされている。

Ⅱでは、戦後の国語教育学の展開が、一九五〇年代を中心にとりあげられている。ここでは、垣内松三・西尾実・石井庄司・時枝誠記・倉沢剛・興水実の諸家の提唱・試論が、資料中心にたどられている。

Ⅲでは、国語教育学の系譜・創建に關し、一 近代国語教育学の系譜―三つの系列を中心―
二 国語教育史的にみた興水理論
三 藤原与一先生の国語教育学創建―
四 国語学習個体史稿―
五 国語教育書誌の考察の四論稿が収められている。

本書について、野地先生は、「……わが国のばあい、戦前・戦後それぞれに、一九三〇年代・一九五〇年代を中心に、「国語教育学」樹立に關し、さまざまな提唱・試論が意欲的になされた。本書は、それらの軌跡をできる

がぎり資料本位にたどろうとした、その中間報告である。ために、とり扱った範囲もせまく、とりあげた研究者・研究書（論文を含む）もかぎられたものとなった。すなわち、わたくし自身の国語教育学史へのこたびの試みは、将来構築されうべき国語教育学史のための準備作業の域を出ないのである。（まえがきと述べておられる。きわめて謙虚な述べかたになつているが、本書によって「国語教育学史」に一つの見通しがつけうるようになったことの意味はきわめて大きいと言わざるをえない。私たちの課題は、野地先生自らが「準備作業」とよばれる本書の成果を一日も早く自らのものにし、私たちにしても本書を「準備作業」とよべるようにしていくことであらう。

（昭和49・9・1、共文社刊、A5判二三八

ページ、二二〇〇円）

（大槻和夫）